

## (資料2)

### 名古屋カテドラル聖ペトロ聖パウロ大聖堂

#### (なごやかてどらるせいペとろせいぱうろだいせいどう)

員数：1件

所在地：名古屋市東区葵 1-1208

所有者：カトリック名古屋教区

#### 1 登録理由

名古屋市東区に建つ教会堂。鉄骨鉄筋コンクリート造で、内外部ともコンクリート打ち放しとする。ゴシック建築を基調としている。

(登録基準：造形の規範となっているもの)

#### 2 概要

鉄骨鉄筋コンクリート造平屋一部2階地下1階建、銅板葺、搭屋及び階段付

建築面積 928 m<sup>2</sup>、建設年代 昭和 36 年

名古屋カテドラル聖ペトロ聖パウロ大聖堂は、名古屋市東区にあり、昭和 37 年にカトリック名古屋教区の司教座聖堂<sup>1</sup>となる。

西洋のゴシック建築<sup>2</sup>を模し、単層・単廊の長堂式となっている。内外部とも打ち放しコンクリートで、中世の石造伽藍を思わせる。また、配置は採光を考慮して、従来の建築方位（東西軸）にとらわれない南構えとなっている。正面は、地階を半地下にして基壇<sup>3</sup>を構築し、広い前廊階段を置く。その偉容は、切妻<sup>4</sup>の本堂とその左右に頂尖塔を冠した角型鐘楼で、双塔と一体になったゴシック様式に立面構成となっている。

身廊<sup>5</sup>は梁間分割され、長方形の6ベイ（梁間）で構成されている。また、身廊側面は2層に分割され、上下にステンドグラスを入れ、廊内をより明るくしている。

多角形のアプス（後陣）<sup>6</sup>には、半円蓋にリブヴォールト<sup>7</sup>（ろっこつしききゅうりゅうこうぞう肋骨式穹窿構造）を架け

<sup>1</sup>司教座聖堂：カトリック教会の中心となる教会の聖堂のこと。カテドラル（フランス語：Cathédrale）、大聖堂とも呼ばれる。

<sup>2</sup>ゴシック建築：12世紀後半から広まったフランスを発祥とする建築様式。

<sup>3</sup>基壇：社寺・宮殿などの建物の基部に築いた石造や土造の壇。

<sup>4</sup>切妻：屋根の最頂部の棟から地上に向かって二つの傾斜面が本を伏せたような山形の形状をした屋根のこと。

<sup>5</sup>身廊：キリスト教聖堂内部の祭壇手前の礼拝のための空間のこと。

<sup>6</sup>アプス（後陣）：聖堂などの建物・部屋から突出した半円形の内部空間。アプスと身廊との間に方形または長方形の空間を加えてここを聖職者席とし、アプスに大祭壇を配置してここを聖所とした。聖職者席と聖所を一括して内陣という。

ており、そのリブに<sup>くりかた</sup>割形をつけて昇高性を高めている。

各室内の内装や家具には無垢の木を使用、床には自然石、階段に厚みのある石、飾り窓や建具には過度の装飾を避けて、その空間は素材を通した荘厳さや重厚さを感じさせる。また、堂内は、創建時から多くの美術工芸品で飾られており、その主なものは、イタリア及びドイツから調達されている。

堂内を空間分節させることで、気積<sup>8</sup>を大きくし良質な反響を確保するとともに、音源となる内陣<sup>9</sup>には、反響性の高いコンクリートや大理石など高い素材を選定している。地階全面を信徒のための集会室にし、文化活動の機能性を重視するなど、近代のカトリック教会建築の範例であり、日本における「モダンムーブメント<sup>10</sup>建築」に相応しく、高品質で評価が高い。

---

<sup>7</sup>リブヴォールト：アーチを平行に押し出した形状（かまぼこ型）をした天井様式。

<sup>8</sup>気積：建築用語で、室内の空気の総量のこと。

<sup>9</sup>内陣：キリスト教の聖堂において、大祭壇が置かれ、聖職者の専用する部分をいう。

<sup>10</sup>モダンムーブメント：20世紀建築の主要な潮流のひとつ。「18、19世紀に端を發する合理主義・社会改革的な思想や技術革新をベースに、1920年代、30年代に西ヨーロッパで明確な形をとり、線や面の構成による美学にもとづいて40年代から世界中でつくられはじめた建築」を意味する。



南側面正面（名古屋市教育委員会提供）



身廊（北西側面）（名古屋市教育委員会提供）



身廊（南側面）（名古屋市教育委員会提供）



内陣リブヴォールト天井（名古屋市教育委員会提供）